

古墳時代後期の石棺にみる吉備の歴史

草原 孝典

【講座の概要】

弥生時代の終わり頃から、吉備では、他の地域よりも一歩先んじて、特定の人物のための規模の大きなお墓を築き始めます。そして前方後円墳というひょうたん形の古墳が、日本列島全体で築かれるようになった古墳時代においても、全長が100mを越える大形古墳を築き続け、やがて古墳時代中期には全長が350mにも達する造山古墳を出現させるに至ります。その後、古墳時代中期後半から同後期初頭には、ずば抜けた規模の古墳は認められなくなりますが、古墳時代後期中頃になると、また巨大な古墳が築かれます。

古墳時代後期は、埋葬される部屋の構造が、竪穴式石室というほぼ一回きりの埋葬に使用されるものから、何度でも埋葬することが可能な横穴式石室へと変化します。それとともに、古墳の墳丘規模も縮小し、古墳の規模をはかる物差しは、墳丘の規模に加えて石室の規模や使用される石材の大きさにも重点がおかれます。大きな石材を用いた規模の大きな石室をもった古墳の方が、その当時の古墳の被葬者がもっていた勢力の強さを示していると考えられています。奈良県の明日香村にある石舞台古墳は、当時の畿内において、最有力の豪族であった蘇我馬子の墓と考えられており、巨大な石材を用いた規模の大きな石室は、勢力の大きさを象徴しています。吉備においても石舞台古墳と同規模の古墳が3基あり、吉備の3大巨石墳と呼ばれています。後の備中国に築かれたこうもり塚古墳（総社市）、箭田大塚古墳（倉敷市）、後の備前国に築かれた牟佐大塚古墳です。横穴式石室は、石の積み方によって時期差を推測することができます。とくに奥壁は、複数の石を積む段階から1石で構成する段階へと変化します。3大巨石墳のうち、奥壁が1石のものは、箭田大塚古墳と牟佐大塚古墳で、両墳は近接した時期に築かれたと考えられます。ところが、牟佐大塚古墳には石を刳り抜いたりっばな家形石棺があるにも関わらず、箭田大塚古墳には自然石を組み合わせた貧相な石棺しかありません。この相違は、古墳時代後期において、畿内政権が介入した吉備内部の政争に起因すると考えられます。吉備が前、中、後に分割されたことの最も直近の端緒でした。

【参考文献】

- 葛原克人ほか1986年「箭田大塚古墳」『岡山県史第18巻石』岡山県
春成秀爾ほか1971年「岡山市牟佐大塚古墳」『古代吉備』七
近藤義郎1986年「こうもり塚古墳」『総社市史 考古資料編』総社市
倉林真人2005年『吉備考古学ライブラリィ⑩石棺と陶棺』吉備人出版
村上幸雄1987年「古墳時代後期」『岡山県の考古学』吉川弘文館
草原孝典2012年「上道氏と下道氏の相克」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要 第4号』

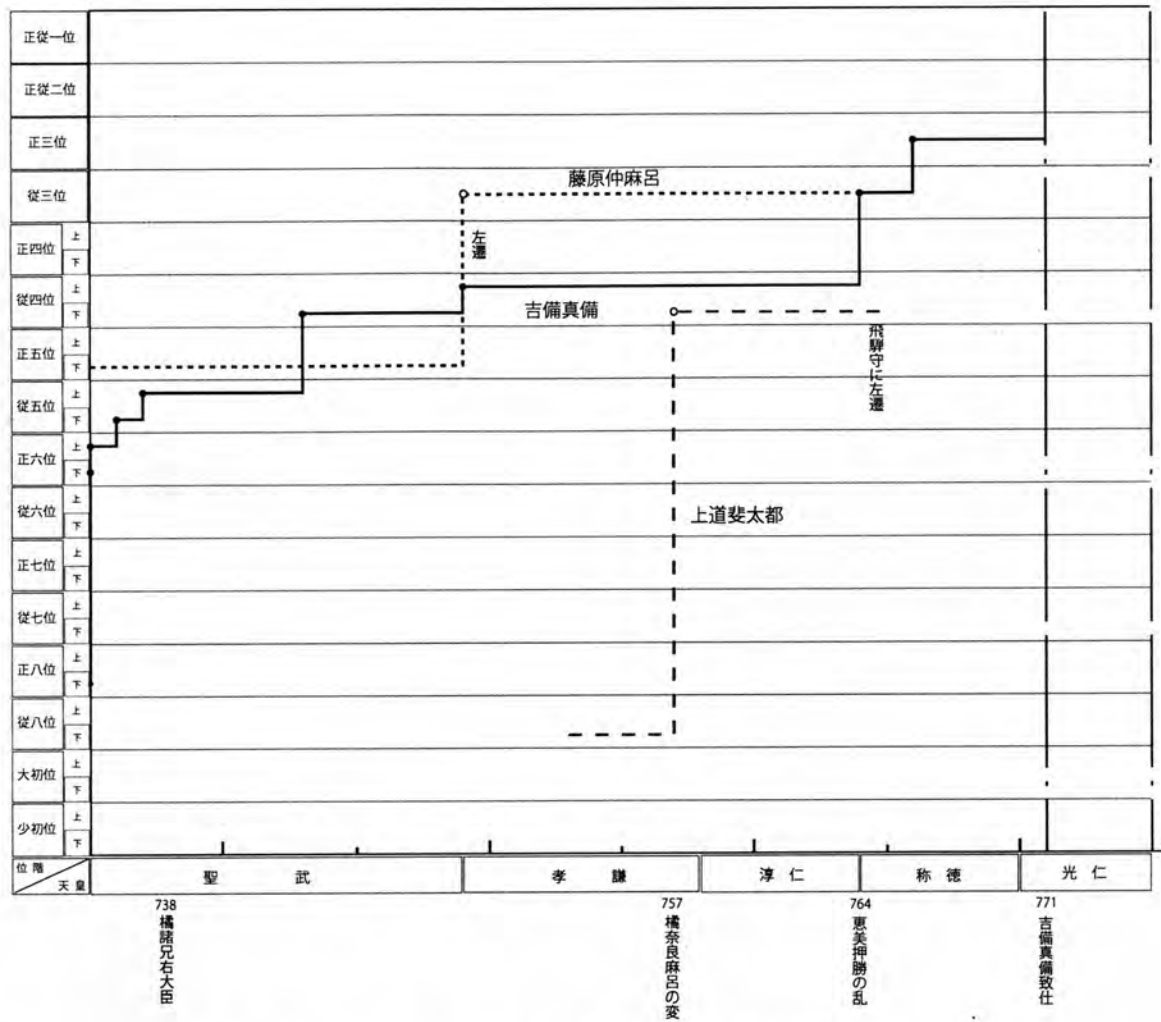


図1 吉備真備・上道斐太都・藤原仲麻呂の昇進過程

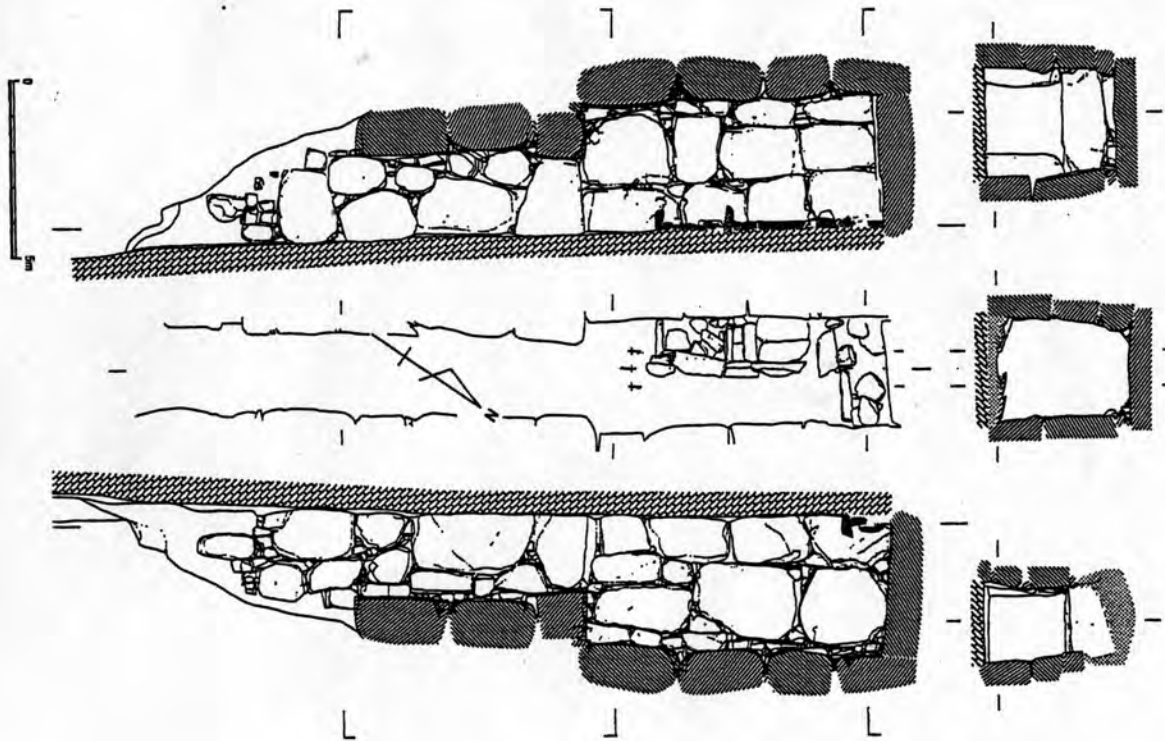


図2 埼玉大塚古墳

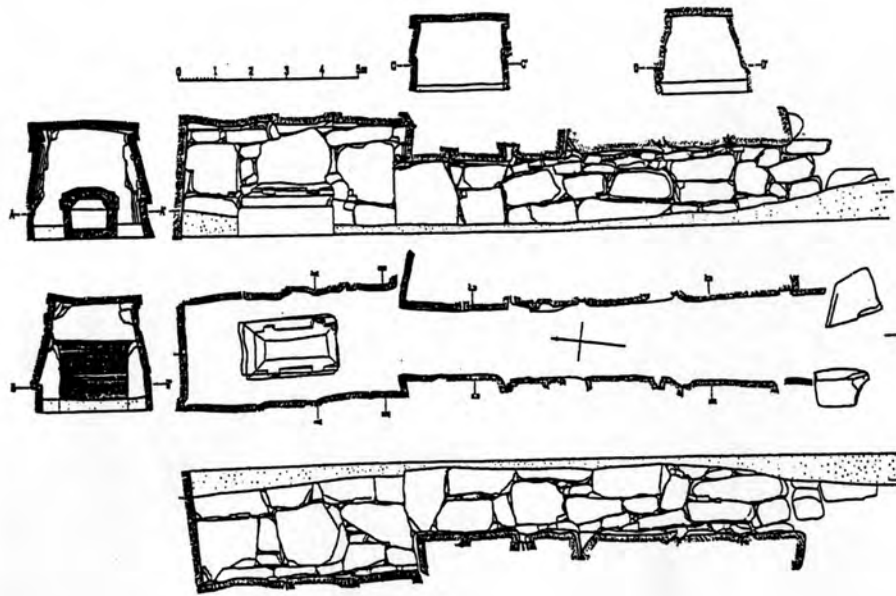


図3 牟佐大塚古墳

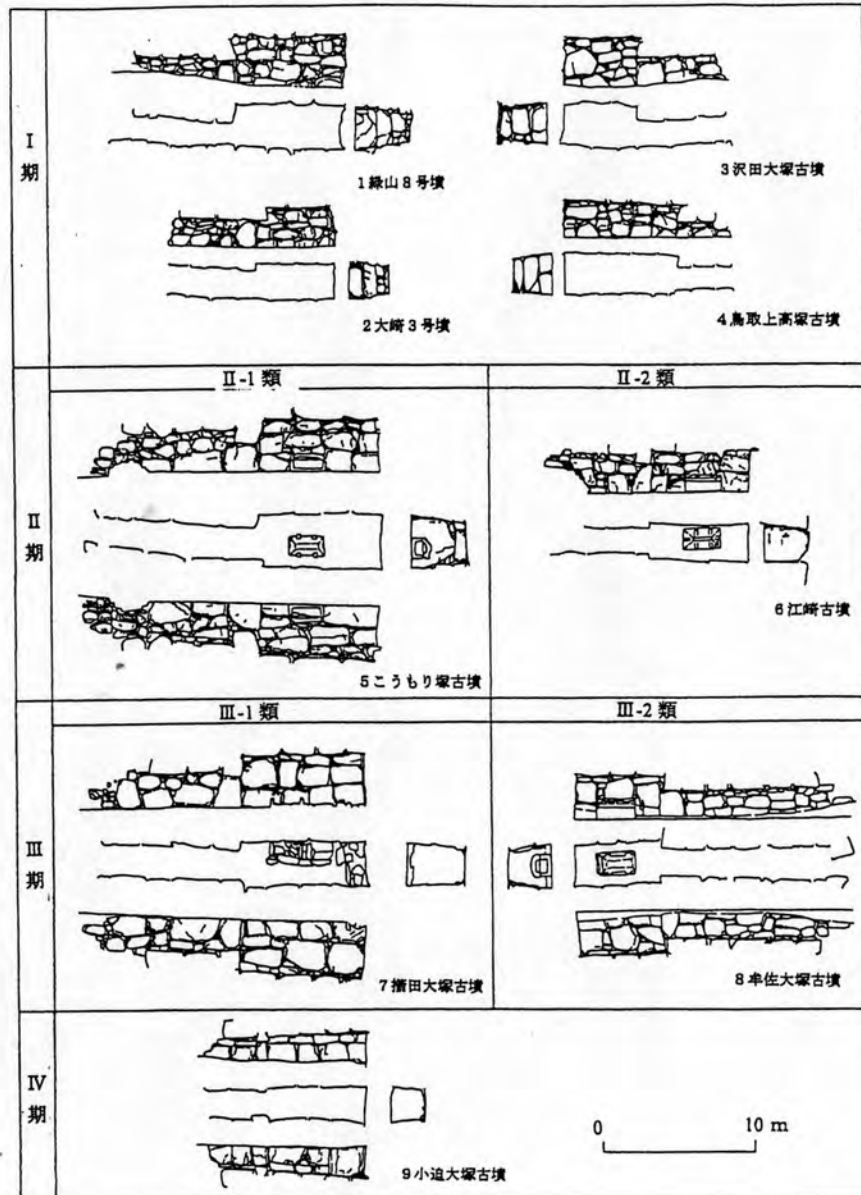


図4 石室の変遷

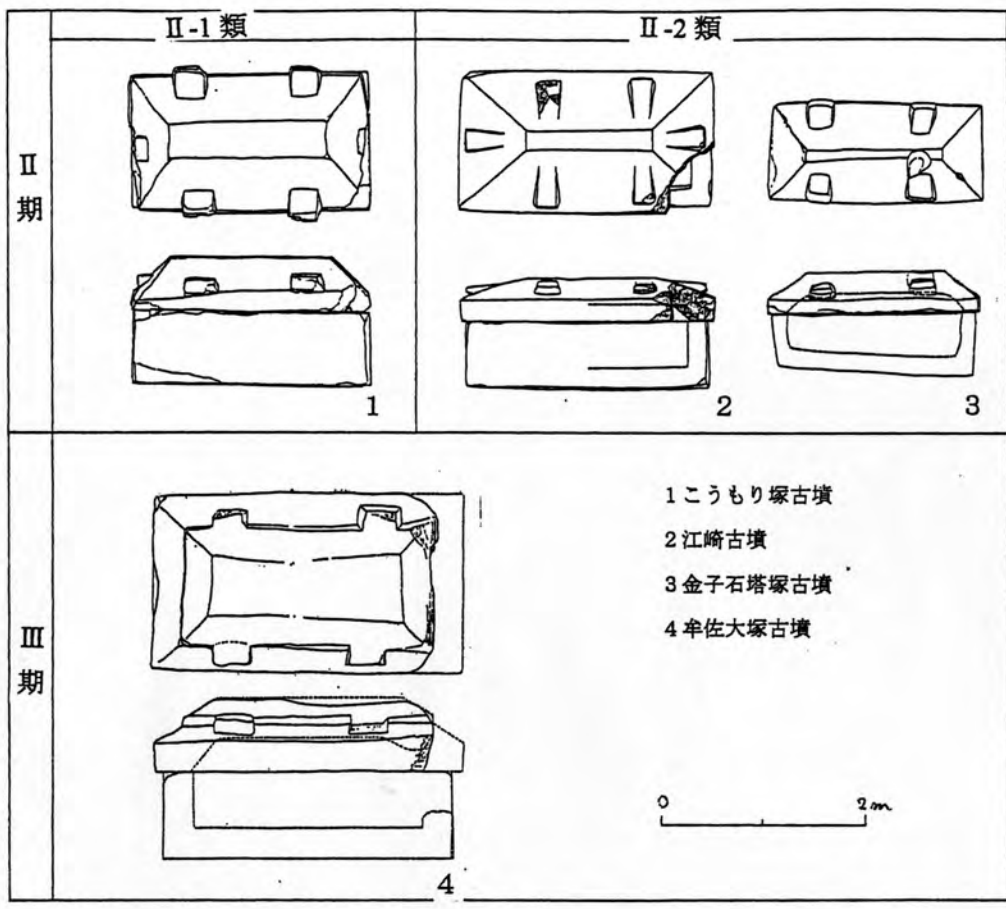


図5 浪形石製家形石棺の変遷

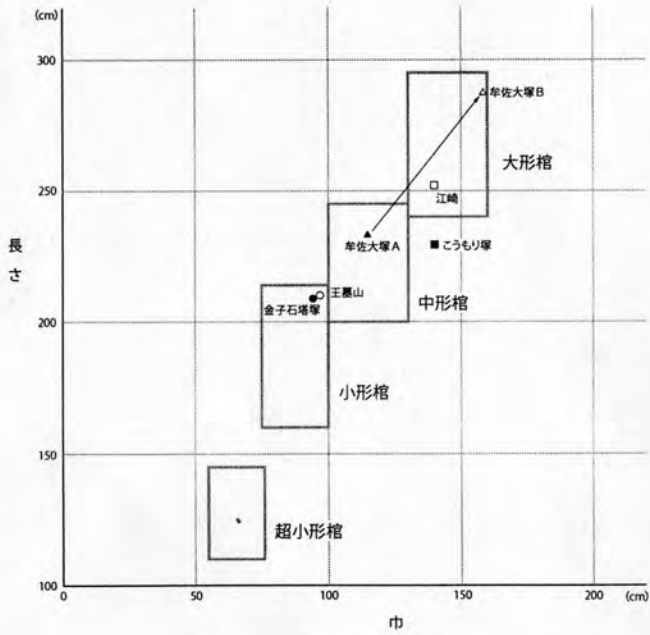
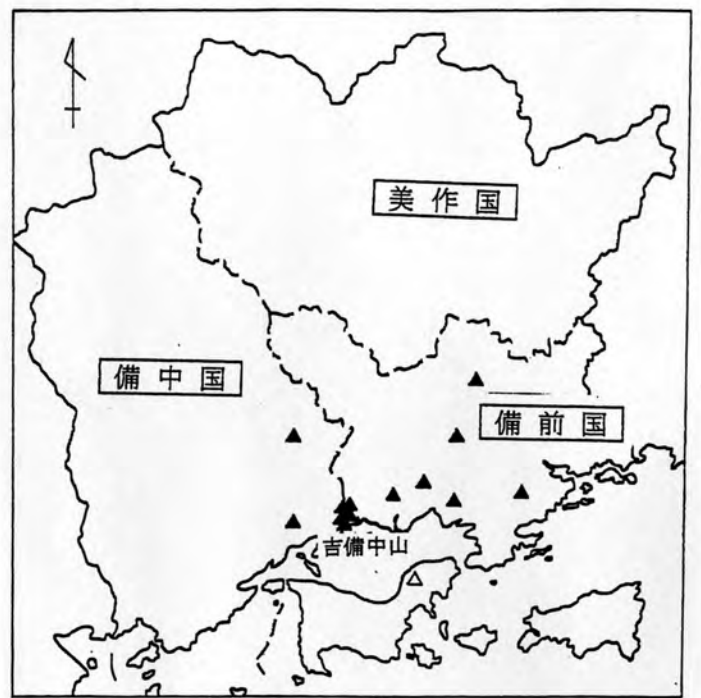


図6 家形石棺の規模



▲ 竜山石家形石棺

図7 竜山石製家形石棺の分布 (7世紀)



图8 吉備式瓦当文の分布

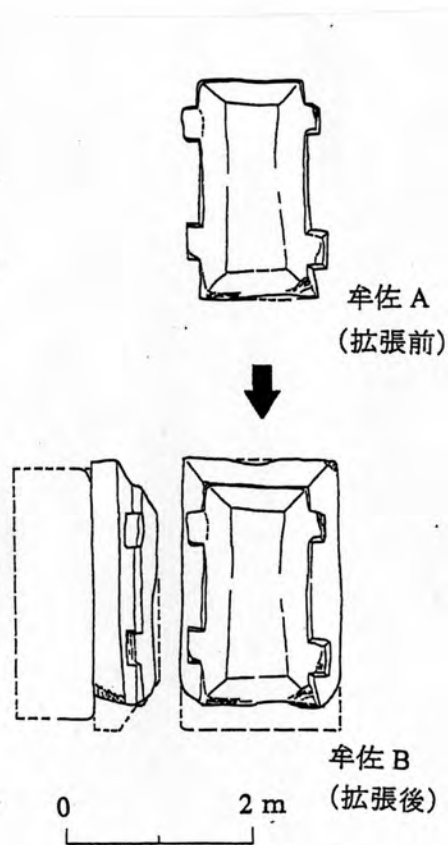


图9 牟佐大塚古墳家形石棺の変遷 (推定)